

オリヴィエ・メシアンとその門弟たち  
—メシアン没後30年記念—

Olivier Messiaen et ses élèves

日仏現代音楽協会会員ピアニスト4人による  
ピアノ・コンサート vol. 4

2022年7月30日(土) / 31日(日)

16時開演

両国門天ホール

オリヴィエ・メシアン  
Olivier MESSIAEN  
悲しい風景のなかの恍惚の歌（『前奏曲集』より）  
Chant d'extase dans un paysage triste  
・・・ 安田 結衣子

喜びの精霊のまなざし（『幼子イエスに注ぐ20のまなざし』より）  
Regard de l'Esprit de joie  
・・・ 飯野 明日香

4つのリズムのエチュード  
Quatre études de rythme  
I. 火の島 I (飯野) — II. 音価と強度のモード (安田) —  
III. リズム的ネウマ (大須賀) — IV. 火の島 II (瀬川)

ヨーロッパコマドリ、ウタツグミ（『鳥の小スケッチ』より）  
III. Le rouge-gorge, IV. La grive musicienne  
・・・ 大須賀 かおり

休憩  
intermission

ピエール・ブーレーズ  
Pierre BOULEZ  
ピアノ・ソナタ第3番 より トロープ  
Troisième Sonate ~ Formant 2 : Trope

ヤニス・クセナキス  
Iannis XENAKIS  
R に（モーリス・ラヴェルへのオマージュ）  
À R. (hommage à Maurice Ravel)  
・・・ 瀬川 裕美子

トリスタン・ミュライユ  
Tristan MURAIL  
別離の鐘と微笑み ～オリヴィエ・メシアンの追憶に  
La cloche d'adieu, et un sourire - In memoriam Olivier Messiaen  
・・・ 飯野 明日香

ミカエル・レヴィナス  
Michaël LÉVINAS  
3つのエチュードより II. 一音による変奏曲 III. 開放弦  
Trois Etudes II. Variations sur une seule note III. Cordes à vide  
・・・ 大須賀 かおり

ジョージ・ベンジャミン  
George BENJAMIN  
ピアノ・フィギュアズより  
Piano Figures  
I. スペル — II. 結び目 — III. 鏡のなかで —  
IV. 中断 — V. ソング — VI. ハンマー  
・・・ 安田 結衣子

福士 則夫  
Norio FUKUSHI  
とぎれた記憶  
Dislocated Memories  
・・・ 瀬川 裕美子

飯野 明日香 Aska lino

東京藝術大学附属高校、同大学、パリ国立高等音楽院ピアノ科、フォルテピアノ科卒。ベルギー政府給費留学生としてブリュッセル王立音楽院ピアノ科マスターコース修了。リサイタルシリーズ「Parfum du Futur」、室内楽シリーズ「l'Espace」などの演奏活動、4枚のCDは全てレコード芸術特選盤他の高い評価を得ており、特に「France Now」は「クラシック不滅の名盤1000」（レコード芸術編）に選出。2010年第28回中島健蔵音楽賞、2014年度レコード・アカデミー賞（現代曲部門）受賞。洗足学園大学、桐朋学園大学、東京藝術大学、同附属高校非常勤講師。ピティナ汐留イタリア街ステーション代表。https://www.askaiino.com

大須賀 かおり Kaori Ohsuga

桐朋学園大学音楽演奏学科卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。日本室内楽コンクール第2位。現代音楽演奏コンクール競楽V優勝、第12回朝日現代音楽賞、2003年度青山パロックザール賞受賞。2020年コジマ録音よりリリースしたアイヴズのソナタ全集が第75回文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞。これまでに多くの作曲家の作品初演やCD録音に携わり、初演数は300曲を超える。桐朋学園芸術短期大学、東京成徳短期大学、相模原栄光高校芸術科非常勤講師。http://kaoriohsuga.com

瀬川 裕美子 Yumiko Segawa

国立音楽大学鍵盤楽器ピアノ専修を首席、同科ソリストコースを最優秀で卒業。2013年よりリサイタルを東京文化会館小ホールやトッパンホールにてバッハから邦人委嘱作品まで、コンセプチュアルなプログラムで8回展開。Boulezピアノソナタ全曲リサイタル、並びに同プログラムのCDは「レコード芸術」誌特選盤に選出され、朝日新聞等多数のメディアで紹介される。これまでCD5枚リリース。東京オペラシティリサイタルシリーズ「B→C」に出演。アンサンブル活動に加え、他分野の芸術と連関させた独自のレクチャーも行っている。

安田 結衣子 Yuiko Yasuda

京都市立音楽（現京都市立京都堀川音楽）高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。同大学卒業時にアカンサス音楽賞受賞。パリ国立高等音楽院ピアノ伴奏科に審査員の満場一致で入学、同音楽院を最優秀の成績で卒業。Klangspuren Schwaz 音楽祭にインターナショナルアンサンブルモデルンアカデミー生として参加。第10回現代音楽演奏コンクール〈競楽X〉入選。現代音楽セミナー「秋吉台の夏」ピアニスト兼講師。作曲家としても委嘱作品多数。現在は日本を中心にピアニスト・作曲家として活動する傍ら、東京藝術大学音楽学部などで後進の指導にもあたっている。

司会進行・企画構成 夏田 昌和 Masakazu Natsuda

1968年東京生まれの作曲家・指揮者。パリ国立高等音楽院で作曲を師事したジェラルド・グリゼー、指揮を師事したジャン＝セバスティアン・ペローは共にメシアンの門弟、東京藝術大学で伴奏法や総譜奏法を師事したアンリエット・ピュイグ＝ロジェはメシアンの音楽院時代よりの友人。メシアン作品ではこれまでに「異国の鳥たち」「天の都市の色彩」を指揮。2017年には「音坊主～メシアンへと続く道」公演をプロデュースし好評を博した。

### 前奏曲集～悲しい風景のなかの恍惚の歌

パリ音楽院での11年におよぶ学習期間の終盤、1929年にメシアンが作曲した《前奏曲集》は、作曲クラス教授ポール・デュカの仲介によってデュラン社から出版された。師デュカのピアノ作品にも通じる内省的で謹厳な雰囲気をもたえつつも、その後『わが音楽語法』（『音楽言語の技法』）でまとめられた独自の語法を早くも提示しており、移高の限られた旋法などに由来する色彩感に、後のメシアン作品との共通点を見ることが出来る。第2曲〈悲しい風景のなかの恍惚の歌〉はその名の通り、長調をはっきりと表に出した歌のセクションの前後に、悲しみに打ちひしがれた様子を彷彿とさせる簡素な音楽が配されるという構造をもち、3つのセクションそれぞれも3つの要素を内包している。《前奏曲集》の被献呈者であり、1930年3月1日に国立音楽協会の演奏会で部分初演を行ったアンリエット・ピュイグ＝ロジェ（当時の姓はロジェ）はナディア・ブーランジェの後任としてパリ音楽院ピアノ伴奏科教授に就任、晩年には日本に定住し教育者として多大な貢献を果たした。

### 幼子イエスに注ぐ20のまなざし～喜びの精霊のまなざし

1940年代前半のメシアンは、《アーメンの幻》(1943、2台ピアノ) および《神の臨在の3つの小典礼》(1943-44、ピアノ、オンド・マルトノ、女声合唱、管楽器を含まないオーケストラ)、《幼子イエスに注ぐ20のまなざし》(1944)という信仰をテーマとする作品を立て続けに作曲している。本作品はもともと、フランス国営ラジオで放送される詩の朗読のための付随音楽として構想された。音楽放送を統括していた作曲家アンリ・バロー(1900-97)は、イエスの降誕の物語を詩と音楽で表現するクリスマス用の番組を企画し、テキストと音楽の創作をそれぞれ作家モーリス・トエスカ(1904-98)とメシアンに依頼。しかし番組の企画は結局立ち消えとなり、音楽のみが完成され残ることとなった。第10曲〈喜びの精霊のまなざし〉は《トゥランガリーラ交響曲》(1946-48)の第5楽章〈星々の血の喜び〉同様、作品前半の掉尾を飾る華々しく演奏効果の高い曲で、単独で演奏されることも多い。

### 4つのリズムのエチュード

ピアノ曲《カンテヨジャヤー》(1949)、ミュージック・コンクレートのための《音色-持続》(1952)と並ぶメシアンのいわゆる実験期の作品で、1949-50年にかけて作曲された。第2曲〈音価と強度のモード〉は、12音技法に由来する音列の組織法を音高、持続、強度、アタックに応用するトータル・セリアリズムの初の実践例とされ、20世紀音楽史のひとつの金字塔とみなされる。ダルムシュタット国際現代音

楽夏期講習で〈音価と強度のモード〉を知ったブルーゼとシュトックハウゼンは衝撃を受け、前者は2台ピアノのための《構造》の創作に本作の要素を採り入れ、後者はパリ音楽院でメシアンに師事することを決意した。全体は〈火の島1〉〈音価と強度のモード〉〈リズム的ネウマ〉〈火の島2〉からなり、〈火の島〉の2曲はパプア島に捧げられている。出版は当初デュラン社から1曲ずつ行われており、《4つのリズムのエチュード》というタイトルは1951年5月、メシアンがパテ・マルコーニ社にみずから演奏して行った録音で初めて現れている。4曲がこの名称の下にまとめてデュラン社から出版されたのはようやく2008年である。

### 鳥の小スケッチ～Ⅲ.ヨーロッパコマドリ、Ⅳ.ウタツグミ

1985年に作曲されたメシアン最後のピアノ曲。これに先立つ2つの鳥の作品、演奏時間約2時間30分の《鳥のカタログ》(1956-58)と約35分の《ニワムシクイ》(1970)は、鳥の歌のみならず山や湖といった景観をも音楽化する壮大な企てだったが、《鳥の小スケッチ》はいずれも2～3分の作品からなる小品集で、練達の作曲家の手になる珠玉の曲集とよぶにふさわしい。書法においてもかつての華々しさに代わって、鳥の歌をそのまま写し取ったかのような簡潔さが顕著であり、扱われる鳥もけっして珍しいものではない。いずれもメシアン自身ソローニュの別荘から日常的に眺めていた鳥たちである。第1、3、5曲は〈ヨーロッパコマドリ〉で、ルフランのように機能するこの3曲に第2曲〈クロウタドリ〉、第4曲〈ウタツグミ〉、第6曲〈ヒバリ〉が組み合わされる。〈ヨーロッパコマドリ〉では、鳥の歌における微細なゆらぎを表現するかのよう、テンポが細やかかつ柔軟に変化する。第4曲〈ウタツグミ〉はメシアンの書いた鳥の音楽のなかで鳥の歌の純粹で忠実な再現という印象をもっとも強く与える作品であり、高音域で多様な音型を次々と提示する。

平野 貴俊

1987年東京都生まれ。2010年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程、および音楽文化学(音楽学)専攻博士後期課程修了。博士(音楽学)。アカンサス音楽賞および大学院アカンサス音楽賞受賞。在学中にフランス政府給費留学生として渡仏、国立社会科学高等研究院(EHESS)博士課程にて20世紀後半のフランス国営放送による音楽活動を研究。サントリーホール サマーフェスティバル、東京オペラシティ「コンポーザム」など、現代音楽を中心とする演奏会の曲目解説・コラムの執筆、翻訳などに携わる。校訂譜に『リリ・ブーランジェ ピアノ曲集』(2015、カワイ出版)、訳書に『オリヴィエ・メシアンの教室』(ジャン・ボワヴァン著、小鍛冶邦隆監訳。2020、アルテスパブリッシング)がある。日本音楽学会、日仏現代音楽協会、日本ケベック学会各会員。

**ピエール・ブーレーズ ピアノ・ソナタ第3番(1955-57/63)～トロープ**

ブーレーズ(1925-2016)は20世紀を代表する世界的な作曲家、指揮者。1944-45年にメシアンのと声クラスに在籍したほか、私的な分析の授業にも参加していた。

ブーレーズの作品の中でも特に複雑な構造を持つ本曲は、全体が5つの「フォルマント」で構成され、本日演奏される「トロープ」はその2番目に当たる。トロープ自体も「注釈/テキスト/挿入句/注解」の4つからなり、その演奏順は奏者自身が選択できる。また「注釈/挿入句」にはカッコで括られた様々な装飾音(トロープ)が施されており、これらを演奏するか否かも、奏者に委ねられている。メシアンの〈音価と強度のモード〉(前半の解説参照)を嚆矢とするトータル・セリエリズムの試みは、「偶然性」の音楽との接触を経て、本作の「開かれた形式」へと到達したと言えるだろう。なお、5つの「フォルマント」のうち出版されているのは2つだけであり、作品は壮大な“Work in Progress”のまま遺されることとなった。

**ヤニス・クセナキス R に (モーリス・ラヴェルへのオマージュ) (1987)**

クセナキス(1922-2001)はギリシアの作曲家。建築家ル・コルビュジエの弟子としていくつかの作品に携わったのち、作曲家に転向して確率論などの数学に基づいた作品を発表した。この革新的な作曲法が、メシアンの助言によって後押しされたことはよく知られている。1951-54年にかけて〈美学と音楽分析クラス〉に在籍。

ラヴェルの没後50年を記念した委嘱作である本曲は、常に同時に進行する2本の線動的な動きと、ブロック状の和音によるアタック、というきわめて限られた素材の組み合わせから作られている。3分に満たない小品でありながら、2本の線の方向（上行/下行、平行/反行）と移動速度の変化、素材の出現頻度の変化、ふたつの素材の融合、後半にわずかに登場する和音のトレモロ(これも元の素材から帰結される)など、クセナキス作品の特徴である、剥き出しの「時間」と「形式」そのものを聴くような体験ができる佳品である。

**トリスタン・ミュライユ 別離の鐘、微笑み～メシアンの追憶に (1992)**

ミュライユ(1947-)はル・アーヴル出身の作曲家。1967-72年にかけて作曲クラスに在籍した。鐘の音などの音響スペクトル(倍音構造)解析に基づいた創作を行い、ジェラルド・グリゼイやレヴィナスとともに「スペクトル楽派」と呼称される。

本曲はドイツの音楽誌『MusikTexte』のメシアン追悼号に、恩師へのオマージュとして楽譜の形で発表された作品。ミュライユがしばしば用いる鐘の音に基づいた響きの連なりの背後に、メシアンの《前奏曲集》第6曲〈苦悩の鐘と別離の涙〉の書法と和音、曲名の引用がエコーのように響いている。なお、原曲名の「苦悩」と「涙」の部分は、師メシアンがそれに打ち勝った証である「微笑み Un Sourire」(これもメシアン晩年の管弦楽曲名からの引用)という語に置き換えられた。

**ミカエル・レヴィナス 3つのエチュード(1991-92)より**

レヴィナス(1949-)はパリ出身の作曲家、ピアニスト。1969-74年にかけて、メシアンの分析、作曲クラスに在籍。1987-2014年までパリ音楽院分析クラスの教授を務めた。1973年にグリゼイ、ミュライユらとアンサンブル・リティネレールを設立しスペクトル楽派の活動の中心を担った。本曲はピアノの内部奏法を伴った作品で、弦を掌で押さえるミュートや、特定の残響を響かせるハーモニクス奏法が随所に用いられている。様々な強さのアタックや、特定の音を持続させるソステヌート・ペダルを駆使して、本来は均質な音響構造を持つピアノという楽器から、さまざまな残響＝ポリフォニーを引き出すことを企図している。レヴィナス作品にしばしば見られる、同じ音型や音響の執拗な反復や非楽音的な音響への偏愛から生まれる音楽は、スペクトル楽派と呼称される作曲家たちの中でもひと際つよい個性を放っている。

**ジョージ・ベンジャミン ピアノ・フィギュアズ(2005)より**

ベンジャミン(1960-)はイギリスの作曲家、指揮者。メシアンがパリ音楽院を退官する1977-78年に、作曲クラス最年少の16歳で入学した最後の愛弟子の一人。

ピエール＝ローラン・エマールの委嘱による本曲は、ほとんど休みなく演奏される10の小品からなる。それぞれの曲はどれも短い、無駄のない洗練された書法、卓越した響きとリズムは清新な印象を残す。本日の演奏の最後を飾る第6曲〈ハンマー〉は、金床を叩くような硬質な和音のアタックの連続から、生き生きとしたリズムが生みだされる。なお本作で用いた素材は管弦楽のための《Dance Figures》に受け継がれ、後に大成功を収めることになるオペラの創作へと結びついていく。

**福士則夫 とぎれた記憶(2000)**

20世紀最後の年がJ.S.バッハ没後250年になるのを記念し、全音楽譜出版社の企画で作曲されたものであり PIANO2000 として出版されている。曲の構造はおよそ二つの部分に分けられ、前半は引用された和音に向かって持続が形成され、後半は音響構造が溶解し変形していく過程を暗示している。バッハのコラールからの引用(マタイ受難曲の中心素材であるが、原曲はH.L.ハスラーの受難のコラール「血潮のしたたる主の御頭」)は中間部の強奏の部分に3つの和音を、終結部には2つの和音を切り離して使用している。タイトルの“Dislocated”には位置を変える、狂わせる、転移するなどの意がある。

(カメラータ・トウキョウ《花降る森／福士則夫 室内楽作品集Ⅱ》ブックレットより)

福士 則夫

東京藝術大学大学院修了の年、作曲グループ「白浪」を結成し本格的な作曲活動に入る。1972年文化庁芸術祭優秀賞受賞し、翌年フランス政府給費留学生として渡仏、帰国後アンサンブル「Vant d'Orient」を結成し、同団体として音楽賞受賞の他、作品は日本のみならずヨーロッパ、北米、アジアなどでも演奏されている。日本現代音楽協会前会長。日仏現代音楽協会名誉顧問。

企画・構成：夏田昌和 台信 遼（日仏現代音楽協会）

主催：一般社団法人もんでん（両国門天ホール）

共催：日仏現代音楽協会

協賛：アルテスパブリッシング

**門天**  
since 1989

日仏現代音楽協会  
Association Franco-Japonaise  
de la musique contemporaine